〈研究論文〉

ストーマ装具の装着体験を通じて看護学生が捉えた学び

庄村雅子*1・岡部春香*1・岩本敏志*1・中島淑恵*1・大山太*1

Nursing student's learning experience through the wearing ostomy appliance.

Masako SHOMURA *1, Haruka OKABE *1, Satoshi IWAMOTO *1, Yoshie NAKAJIMA *1 and Futoshi OYAMA *1

〈抄録〉

本研究は、看護学生がストーマ装具の装着体験を通して、患者の心理、日常生活の困難さや支援内容についてどのように理解したのかを明らかにすることを目的とした。調査の前に研究者の所属施設の倫理委員会の承諾を得た。看護学生83名のレポートの記述内容をデータとし、内容分析により質的帰納的に分析した。結果は、「生活活動や人との交流への影響（６カテゴリー)、「心理（６カテゴリー)」、「対処（３カテゴリー)」、「必要な看護支援（５カテゴリー)」、および「大切に思う看護支援（２カテゴリー）が抽出され、患者理解と役割理解に構造化された。看護学生は患者の生活面や対人交流、心理面の理解を深め、ストーマ造設およびリハビリテーションに取り組む対象への看護支援のあり方を学ぶことにつながった可能性が示唆された。従って、ストーマ装具の装着体験とその後の生活を振り返り報告させるといった演習は有用な看護教育といえる。

Key words：ストーマリハビリテーション看護、ストーマ、体験学習、看護学生

Ⅰ．はじめに

「リハビリテーション看護論」という科目は、筆者らの所属する大学の看護学科においては、３年次前期に必修科目の１単位として行われている。ICF 生活機能分類を基盤として、多様な生活機能障害にある患者の看護について講義と演習を通して学ばせている。疾病や外傷により解剖学的に身体が変わってしまった場合に、どのような生活機能の変化を生じ、どの程度その人の心理社会面に影響がでるのかをリアルに捉え、「相手の身になって」考え、看護援助することは容易ではない。

実体験のできない内容については、疾患・病態生理・治療方法などから推察して、理解する能力、いわゆる認知的能力に注目することが大切といえる。B.S.Bloom et al.（1973）は、認知的能力と情動的能力の変化との間には密な関係があると述べ、情動的な反応から、認知的理解へと結びつく可能性を示唆する。学生に理解してほしいと考える対象と、同じような状態を仮定して擬似体験をさせることにより、情動的能力を刺激することは、対象の立場を多角的に推考して、看護を考えることにつなげていけると考える。

先行研究では、看護基礎教育にある学生はストーマに直接触れる体験や関心が少ない（石橋ほか、2013）ことが示唆されている。看護基礎教育の中で、学生にストーマ造設患者やその看護を学習させるために、装具装着体験（荒木、2005；橋本、2011）や紙上事例の展開（川崎ら、2011）がなされ、いずれも学習効果があったと報告している。しかし、患者の立場に立った具体的な援助を思考できたかどうかに言及されていない。

そこで、本研究では、対象の心身に大きな影響を与え、しかも学生が容易に体験できないストーマを造設したと仮定した擬似体験を行い、その擬似体験を通した、ストーマ保有者の理解やストーマリハビリテーションの学びに関する学習効果と、課題について検討する。

＊１　東海大学健康科学部看護学科（Department of Nursing, School of Health Sciences, Tokai University）

Ⅱ．研究目的

1．ストーマ装具の装着を通したストーマ造設の擬似体験を行い、１日装着して生活した後の課題レポート内容から、ストーマ保有者の生活への理解に関する看護学生の学びを明らかにすること。

2．ストーマ装具の装着体験による学習成果と、今後の課題について検討すること。

Ⅲ．研究方法

1．対象：2011年度リハビリテーション看護論履修者（大学３年生）83名

2．調査方法：リハビリテーション看護論のストーマリハビリテーションの授業において、A大学付属病院の皮膚・排泄ケア認定看護師を講師・演習のコーディネーターとし、サイトマーキングから模擬便（味噌）をいれたパウチの貼付までの一連の演習を行った。装具装着直後と１日装着して普通に生活した後とに、提出してもらった課題レポートを分析素材とした。学生には、ストーマ保有者の身になって、どう感じたか及びどのような援助が欲しいかなどについての下記の「 」内の具体的な質問を記載した規定様式に記述してもらった。「質問１ストーマ装具をつけて過ごしてみて、生活活動や人との交流にどのような影響があったか？　自分が体験したことを書いてください。質問２ストーマ装具をつけて過ごしてみて、改めて考えた時に、自分が病気や治療によって、ストーマを造設し生涯生きていくことになったらどう感じ、どう対処するか、どんな援助がほしいか。質問３授業と演習、その後のストーマ装具を付けて過ごした体験から、ストーマリハビリ看護の支援として大切に感じたことを挙げてみてください。」

3．分析方法：Krippendorff の内容分析に従い分析する（Krippendorff,1980）。記述データを意味内容の一貫性で区切り、記述単位を導いた。記述単位から意味の類似性により抽象化していき、コード、サブカテゴリー及びカテゴリーを導いた。

妥当性の確保においては、研究者間で繰返しカテゴリー名の確証を得ると共に、分析に加わっていない研究者間で一致率（Krippendorff の α 係数）を算出した。

4．倫理的配慮：学生には、成績評価の公表後に口頭及び掲示により研究の主旨、目的、方法、使用するデータの内容とデータは匿名化して個人が特定できないような配慮を行うなどを説明した。さらに、拒否できる権利を保証すること、拒否を申し出た場合は、そのレポートは分析データから除くことを約束した。拒否の申し出がなければ協力の同意が得られたものとすることも伝えた。東海大学健康科学部研究倫理審査委員会の承認を得た。

Ⅳ．結果

１．対象者の概要

対象学生は83名でレポートの研究への使用を拒否した者はいなかった。分析対象としたレポートの文字数は62139字であった。

以下、コードを「　」、サブカテゴリーを［　］、カテゴリーを【　】で示し、学生の学びを説明する。

２．ストーマ装具の装着による生活活動や人との交流への影響

296記述単位から、49コード、12サブカテゴリー、６カテゴリーが導かれた（表１）。【日常生活への支障】は、［動作・外出しづらい］、［服装の制約］、［身体的な違和感］など４サブカテゴリーからなり生活のしづらさを表し、119記述単位（40％）と最も多くを占めた。【便・悪臭への気がかり】は、［便が漏れる不安］と［悪臭への気がかり］の２サブカテゴリーで、56記述単位（19％）と２番目に多かった。【周囲への気がかり】は、気付かれてはいないか、不快に思われていないかなどの［周囲への気がかり］により交流を避けたくなるなどを含意し、48記述単位（16％）と３番目であった。【ボディイメージの変容への苦悩】は、［常にストーマが気になる］など２サブカテゴリーから成り、32記述単位（11％）と４番目であった。【ストーマ管理の大変さ】は、［排泄処理に時間がかかる］と［ストーマ管理は大変・面倒］の２サブカテゴリーを意味し、24記述単位（８％）であった。【さほど気にならない】は、意外に気づかれない、だんだん慣れるなどを意味し、17記述単位（６％）と最も少なかった。

３．ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の心理

138記述単位から、22コード、９サブカテゴリー、６カテゴリーが明らかとなった（表２）。【生涯ストーマと

表１　ストーマ装具の装着による生活活動や人との交流への影響

サブカテゴリー（12）	カテゴリー（6）	記述単位数 296（%）
身体的な違和感 服装の制約 動作・外出しづらい 日常生活動作への支障	日常生活への支障	119（40）
便が漏れる不安 悪臭への気がかり	便・悪臭への気がかり	56（19）
周囲への気がかり	周囲への気がかり	48（16）
常にストーマが気になる 身体の変化への戸惑い	ボディイメージの変容への苦悩	32（11）
ストーマ管理は大変・面倒 排泄処理に時間がかかる	ストーマ管理の大変さ	24（8）
さほど気にならない	さほど気にならない	17（6）

表２　ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の心理

サブカテゴリー（9）	カテゴリー（6）	記述単位数 138（%）
ストーマ管理は大変 生涯ストーマとともに生きるのはショック	生涯ストーマと生きる負担感	43（31）
嫌悪や不快の感情 自分らしさが失われる苦悩	ボディイメージの変容による苦悩	24（17）
社会から孤立する	社会からの孤立	22（16）
受け入れなければならない・仕方がない 意外といろいろできる・気づかれない	受け入れなければならない	18（13）
周囲を気にしながら暮らさねばならない	周囲を気にしながら暮らす大変さ	17（12）
日常生活への支障	日常生活での不快感	14（10）

生きる負担感】は、［ストーマ管理は大変］と［生涯ストーマとともに生きるのはショック］の２サブカテゴリーから成り、43記述単位（31％）と最多であった。【ボディイメージの変容による苦悩】は、［嫌悪や不快の感情］と［自分らしさが失われる苦悩］とを意味し、24記述単位（17％）と２番目に多かった。【社会からの孤立】は、［社会から孤立する］という心理を示し、22記述単位（16％）と３番目であった。【受け入れなければならない】は、［受け入れなければならない・仕方がない］と［意外といろいろできる・気づかれない］とから成り、18記述単位（13％）であった。【周囲を気にしながら暮らす大変さ】は、［周囲を気にしながら暮らさなければならない］という否定的な感情を表し、17記述単位（12％）であった。【日常生活での不快感】は、食事や服装を楽しめない、皮膚の蒸れや便臭などを含意し、14記述単位（10％）と最も少なかった。

４．ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の対処

42記述単位、10コード、８サブカテゴリー、３カテゴリーが示された（表３）。【慣れて前向きに取り組む】は、［慣れていくしかない］と［前向きに取り組む］の２サブカテゴリーを含み、17記述単位（40％）と最も多かった。【ケアする術を学ぶ】は、ストーマのセルフケア技術を学ぶことを意味し、13記述単位（31％）であった。３つ目の【ストーマ管理の備えと工夫】は、［他人に見えない工夫］や［漏れ・便臭の確認と工夫］など５サブカテゴリーから成り、12記述単位（29％）と２番目とほぼ同数であった。

５．ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合に必要な看護支援

96記述単位、25コード、15サブカテゴリー、５カテゴリーが表された。【ストーマケア方法の教育】は、いろ

表３　ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の対処

サブカテゴリー（8）	カテゴリー（3）	記述単位数 42（%）
慣れていくしかない 前向きに取り組む	慣れて前向きに取り組む	17（40）
セルフケアするための術を学ぶ	ケアする術を学ぶ	13（31）
ストーマを傷つけない服選び 他人に見えない工夫 自分に合う装具の探索 漏れ・便臭の確認と工夫 外出に備える	ストーマ管理の備えと工夫	12（29）

表４　ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合に必要な看護支援

サブカテゴリー（15）	カテゴリー（5）	記述単位数 96（%）
ストーマの管理方法の教育 ケアしやすい装具の紹介 専門家への相談の機会 スキンケア法の教育	ストーマケア方法の教育	48（50）
受容への支援 イメージを作る援助 別のオストメイトとの交流機会	受容への支援	25（26）
理解して欲しい 普通に接して欲しい 自立するのを見守ってほしい	理解してほしい	13（14）
社会環境の整備：トイレなど 経済的な援助 高齢で自己管理困難となった時の援助	社会資源の整備や活用法の教育	7（7）
プライバシーへの配慮 人目につくから援助はいらない	プライバシーへの配慮	3（3）

いろな［ストーマの管理方法の教育］など４サブカテゴリーを含意し、48記述単位（50％）と最も多かった。【受容への支援】は、25記述単位（26％）と次いで多かった。【理解して欲しい】は、［普通に接して欲しい］や［自立するのを見守ってほしい］など３カテゴリーから成り、13記述単位（14％）を占めた。【社会資源の整備や活用法の教育】は、３サブカテゴリー、７記述単位（７％）であった。【プライバシーへの配慮】は、２サブカテゴリー、３記述単位（３％）であった。

６．ストーマリハビリテーション看護において大切に思う支援

149記述単位、18コード、５サブカテゴリー、２カテゴリーが引き出された。１つは【患者の生活を尊重した支援】で、［前向きさや苦悩に対する精神的な支援］、［患者の生活を尊重した支援］から成り、120記述単位（81％）を占めた。もう一つは【患者と家族の力で対処し慣れるための支援】で、［生活への支障を軽減する支援］と［患者と家族の力で対処し慣れるための支援］と［社会資源の整備や活用の支援］を含み、29記述単位（19％）であった。

７．Krippendorff のα係数による一致率

分析過程に携わっていない２名の研究者とのサブカテゴリーからカテゴリーへの一致率を算出したところ、Krippendorff のα係数は、それぞれ0.823と0.745、３者間の一致率は79.6％と高値を示した。

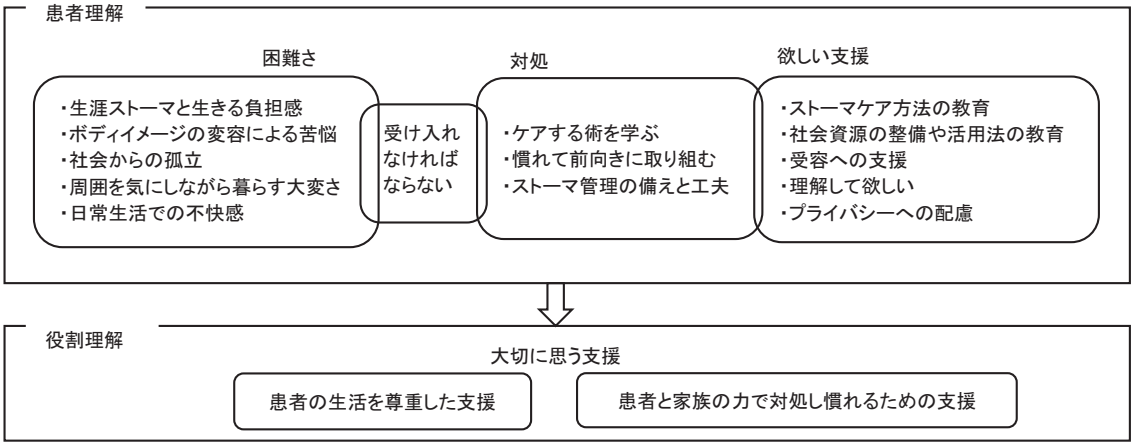
Ⅴ．考察

１．ストーマ装具の装着体験を通した看護学生の学びの特徴

本研究では、分析対象としたレポートにおいて、学生自身に患者の立場で考えさせる始めの問いかけである

表５　ストーマリハビリテーション看護において大切に思う支援

サブカテゴリー（5）	カテゴリー（2）	記述単位数 149（%）
前向きさや苦悩に対する精神的な支援 患者の生活を尊重した支援	患者の生活を尊重した支援	120（81）
生活への支障を軽減する支援 患者と家族の力で対処し慣れるための支援 社会資源の整備や活用の支援	患者と家族の力で対処し慣れるための支援	29（19）



図Ａ　ストーマ装着体験を通した看護学生の学びの構造

“ストーマ装具の装着による生活活動や人との交流への影響”は、総記述単位数296と最も多かった。次ぐ問いかけである“ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の心理”は138記述単位と３番目に多かった。本研究の対象学生の学びは、患者理解が、いずれも多くを占めていることが明らかになった。特に患者にとっての困難さは知覚・認識しやすかった可能性が示唆された。荒木（2005）は、ストーマ患者疑似体験を通して学生が不快感の知覚や日常生活の変化のレベルで学ぶことはできたことを示唆している。橋本ら（2011）はストーマ造設疑似体験を通した学生の学びについて、患者の困難さ３カテゴリーを示唆するにとどまっているとしており、本研究と同様に患者理解に関する学びにとどまったとの報告が散見される。以上より、看護基礎教育の学生にとっては、ストーマをもつ患者を具体的にイメージして理解することに対して、同時に看護者の視点でも考えていけるようにする必要がある。例えば、演習中にストーマの印象について問いかけた後に、看護者としてどう声をかけていく必要があるかといった具体的な問いかけなどの教育的サポートを要する可能性が考えられた。

記述単位数149と２番目に多かったものは、“ストーマリハビリテーション看護において大切に思う支援”であった。これはレポートにおける一番最後の問いかけであった。患者理解に関する４つの問いかけの後に、“大切に思う看護支援”を振り返らせたことで、患者理解に基づく看護の役割理解が促された可能性が考えられた。田中ら（2012）は、ストーマ装具装着の疑似体験を通した学びとして、看護学生の多様な共感的かかわりを導き出し、時期やプログラムの熟考に基づく体験学習の実施の看護役割認識における有用性を示唆している。

本研究において、ストーマを造設し生涯生きていくことになった場合の対処やストーマを造設し生涯生きていくことになった場合に必要な看護支援に関する記述は少なかった。荒木（2005）は、看護の役割認識まで学ぶことは難しいことを示唆している。橋本ら（2011）はストーマ造設疑似体験を通した学生の学びについて、患者理解や具体的な援助の必要性に気づくまでにとどまっている。したがって、ストーマ装具の装着体験を行うだけでは看護実践まで具体的に考えさせることは難しいことが示唆されたと考える。

本研究結果からストーマ装具の装着体験を通した学生の学びは、図Aのように構造化できると考えられた。患者の立場からの困難さ、対処および欲しい支援の患者理解と、看護師の立場からの大切に思う支援とは、患者理解に基づき役割理解の学びが構築される構造として説明された。

2．看護教育への示唆

看護基礎教育の学生にストーマをもつ患者を理解させ、看護を考えさせるにはストーマ装具の装着体験に加えて、意図的な教育的関わりが重要であることが明らかとなった。具体的には、現場の実践家による具体的で現実的な講義と、実際にストーマ装具を装着して生活してみる疑似体験、および患者理解を中心とした問いかけ、具体的な状況設定下での看護援助の試行演習などを組み合わせて行うことが患者理解に止まらず、看護援助を思考させる上においても教育効果としての有用性が示唆されたと考える。何をどこまで学ばせるかに関しては、海外ではストーマに関して臨床での継続教育をプログラム化し、共有して実施と評価を繰返し洗練させている（田中、2012； Chalmers F & White P,2015)。本邦においては地域や施設毎に、臨床での継続教育を行い、一般的なケアの講義や演習と、対応困難な患者の事例検討などを含めて実施されている（田中、2012）が、標準化されプログラム化された教育支援は確立されていない現状にある。今後は、看護基礎教育の段階から継続教育へと連続して、高度な実践を要するストーマ患者の看護（佐藤、2013）に関する教育を検討していく必要があると考える。また、筆者らは本演習を３年次の領域別実習前に行っているが、看護基礎教育の学習の順序性や履修時期が学習成果に影響を及ぼすことも踏まえて、効果的な時期の検討もしていく必要がある。

Ⅵ．本研究の限界と今度の課題

一施設での単年度の調査であるため、結果の適用可能性には限りがある。今後の課題として、継続的に系統立てた体験学習プログラムを実施し有効性を評価する研究や、学生の患者及び看護師役割理解を量的に測定し、学生の学びの構造を裏付けるような検証研究が必要と思われる。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深謝いたします。

引用文献

荒木玲子（2005）：患者理解のための疑似体験の学習効果とその限界 - ストーマ造設患者の疑似体験レポートから -、足利短期大学研究紀要、25、pp.13-17.

B.S.Bloom et al.（1971）： HANDBOOK ON FORMATIVE AND SUMMATIVE EVALUATION OF STUDENT LEARNING、梶田叡一他訳（1973）：教育評価法ハンドブック、第一法規、p429-459

Chalmers F and White P; The benefits of external validation of clinical support resources, Gastrointestinal Nursing, 2015 Supplement,pp.4-7. 2015

橋本裕、小河育恵（2011）：ストーマ造設疑似体験学習を通して学生が得た学び、ヒューマンケア研究学会誌 2、1、pp.30-35.

石橋鮎美、三島 三代子、別所史恵（2013）：看護学生のストーマ・オストメイトに対する認知度とイメージ、日本看護学会論文集 : 看護教育、43、pp.22-25.

川崎泰子、塩見和子、小野晴子：紙上事例「ストーマ造設術を受ける患者の看護」を通した学生の学び、新見公立大学紀要、32、pp.66-73. 2011

古賀亜由美 , 古川智恵 , 佐藤美香ほか：南大阪地域でストーマケア教育を推進するための取り組みの評価　アンケート調査から、STOMA: Wound & Continence、23、1、pp.17-22.2016

Krippendorff K（1980）Content Analysis-An introduction to its methodology, 三上俊治、椎野信雄、橋元良明訳：メッセージ分析の技法 -「内容分析」への招待、勁草書房、1989.

McGeever, L: An alternative to link nurses: sharing specialist skills in colorectal care. British Journal of Nursing, 3/14/2013 Stoma Care Supplement, pp.19-23. 2013

田中恵子、野村志保子、森本紀巳子（2012）：体験学習をした看護学生の患者に対する共感的言動－ストーマ装具を貼用してのオストメイトの疑似体験を通して、日本看護教育学会誌、21、3、pp.25-35.

佐藤 エキ子（2013）：ストーマ・排泄リハビリテーション30年の変遷と将来予測 ET ナースから皮膚・排泄ケア認定看護師への教育と役割の変遷、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌、29、3、pp.77-81.

Abstract

The purpose of this study is to identify the learning experience of nursing students wearing the stoma appliance. We analyzed the transcripts from the student's 83 reports using by Krippendorff's content analysis. As a result, there were 6 categories of influence of daily activities and exchange with a person, 6 categories of psychology, 3 categories of coping with lifelong stoma, 5 categories of needs for nursing care, and 2 categories of the essential nursing cares. In conclusion, the nursing students understood patient's influence of daily activities and exchange with a person, psychology. The nursing students captured nursing care of the stoma and stoma rehabilitation. Patient understanding and role understanding were structured. Thus, it is useful nursing education strategy to the students that practices wearing experience of the stoma appliance, those reviews on student's lifestyle, and writing reports about those reviews.

Key words: stoma rehabilitation nursing, stoma, experiential learning, nursing student